

アート思考入門 (12)

アート思考を身につける取り組みで非常にインパクトのあるのが、アーティストとの対話である。アーティストと話をすることで、ビジネスパーソンは自分が普段物事をあまり深く考えていないことを痛感させられるのである。

昨年、あるNPO法人とビジネスパーソン向けのアート思考トレーニングを開催した。自分が解決したい課題をプレゼンし、アーティストと議論するプログラムだった。ビジネスパーソンは仕事で忙しい中、プレゼン資料を作成してきたが、リサーチも不十分で、固定概念にとらわれた考察となっていることが多かった。

アーティストは考えが浅いことを一瞬で見抜いた。こうした取り組みをする際は、先入観を取り除いて事象を観察し、しっかりとリサーチしなくてはならないこと、観察したことからのような課題が導かれるか根本から考えなくてはならないことを主張した。根本から考えることは抽象度をあげることになり、ひいては思考を飛躍させることにつながる。

ところが企業は、社員が毎日真剣に考えなくても業務が進むように、分業体制をとりルーティン化している。そのため、根本から考える機会が少なくなってしまう。現在の日本企業の仕組みは、高度経済成長期の大量生産時代に確立されたもので、その時代には適していた。

講師を担当したアーティストもそうしたことを感じているよう

芸術家と対話、痛烈な刺激

で、「私は大学でも教えており、学生は自由に発想できていて、なるほどと思うコメントがけっこうある。しかし、ビジネスパーソンは日々仕事に追われているためか、自由な発想が難しいのだろう」と語った。

アーティストは連載でみてきた通り、身の回りの事象について深く考え思考を飛躍させ、唯一無二の作品を制作している。ビジネスパーソンとアーティストでは、仕事に対する姿勢も求められる思考のレベルにも大きな違いがある。

アート思考トレーニングに参加した受講生の中には、異人のような存在のアーティストから痛烈な指摘を受け、これまでにない衝撃的な経験だったという人も多かったと思う。実際、受講生からは次のようなワークの有効性についての意見が寄せられた。

「既成概念に疑問を抱き、深く考えることの重要性、面白さに気づけた」「自分の信念を持ち、生き方を考え、それを実現していく大切さがわかった」「アーティストのものの考え方、アートの価値を知ることができ、アート思考がビジネスに活用できると感じた」

日本が目指すべき未来像として官民で推進する「ソサエティ5.0」で指摘されているように、今後は「デジタル革新と多様な人々の想像・創造力の融合によって、社会の課題を解決し、価値を創造する社会」になっていく。それには、日本型の雇用慣行をモデルチェンジし、一人ひとりが自分の仕事の意味や社会課題について根本から考えられるようにならないといけない。

アーティストとの対話は、ビジネスパーソン自身があまり深く考えていないことに気づき、変革を促す効果的なワークである。とはいっても、アートが好きなビジネスパーソンでなければ、アーティストと直接話をする機会はほとんどないのが現実だ。個別企業として取り組むだけでなく、産業界全体でアーティストとの接点を増やすことを考えてもいい。

ソサエティ5.0時代の働き方

・狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会へと移行するにつれて、組織や働き方は変わってきた。創造社会では、質的に大きく変わる

・必要となるのは想像力と創造力であり、人々がおのおのの価値を生み出す働き方を追求する

(出所) 経団連の報告書「Society 5.0 -ともに創造する未来-」